

# 令和3年 第3回総務経済常任委員会会議録

令和3年3月11日 議員控室

## ○事 件

町長報告事項

- (1) 八雲町水産試験研究施設の研究内容報告について（産業課・水産課）
- (2) サーモン養殖試験事業（経過報告）について（産業課・水産課）
- (3) 建設工事等競争入札参加資格審査結果について（建設課）

## ○出席委員（5名）

委員長 三 澤 公 雄 君  
横 田 喜世志 君  
宮 本 雅 晴 君

副委員長 牧 野 仁 君  
大久保 建 一 君

## ○欠席委員（1名）

田 中 裕 君

## ○出席委員外議員（7名）

議長 能登谷 正 人 君  
関 口 正 博 君  
斎 藤 實 君  
千 葉 隆 君

副議長 黒 島 竹 満 君  
佐 藤 智 子 君  
赤 井 睦 美 君

## ○出席説明員（9名）

産業課長 吉 田 一 久 君  
海洋深層水推進係長 黒 丸 勤 君  
水産課長 伊 藤 修 君  
建設課長 鈴 木 敏 秋 君  
管理係長 作 田 知 宣 君

水産技術主幹 田 畑 司 男 君  
嘱託員 横 山 隆 久 君  
振興係長 藤 原 悟 史 君  
建設課参事 藤 田 好 彦 君

## ○出席事務局職員

事務局長 井 口 貴 光 君

事務局次長 成 田 真 介 君

[ 開会 午後 1時21分 ]

◎ 開会・委員長挨拶

○委員長（三澤公雄君） それでは、本会議に引き続き、常任委員会をはじめます。

【産業課・水産課職員入室】

◎ 所管課報告事項

○委員長（三澤公雄君） まずは、八雲町水産試験研究施設の研究内容報告について、産業課から報告をお願いします。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） それでは、熊石総合支所の産業課、それと水産課の所管事業につきまして、ご報告させていただきます。

はじめに、八雲町水産試験研究施設の研究内容報告についてということで、こちらのほうにつきましては、産業課の嘱託員の横山よりご報告させていただきますので、よろしくお願いいたします。

○嘱託員（横山隆久君） 委員長、横山。

○委員長（三澤公雄君） 横山さん。

○嘱託員（横山隆久君） 北大と共同研究をやっている施設の今年度の報告でございます。

まず、海藻類、これはダルスを中心に行っております。今年度の場合は、昨年度ダルスの種に光を当てて育てたところ、細長い、自然海にはないような細長い形にしかならないということで、今年度は自然海のように幅広いダルスを作りたいということで、水流を与えて実験しました。ただ、波なんかと違まして一方向だけですので、やはり自然海と違って、やはり自然海ほど幅広くならなかったという結果で終わりましたので、来年度はその辺をさらに幅広くできるように考えながらやっていきたいと思います。また、アクリル板に付着させておりますけれども、来年度の場合はちょっとその木質を変えて、木質をちょっと違う版に変えまして、さらに実験を進めて行くということでございます。

それと、ダルスですね、室内の養殖ではダルスがまだ成熟しないということでしたので、成熟しなければ完全に陸上養殖は困難ですので、まず、成熟するかどうかというのも引き続きやっていきたいと思います。

それから分析を行っております。その分析につきましては、スプラウト、要するに●●前の芽の状態で分析したところですね、独特の含有成分、フィコエリスリンっていうんですけども、血糖値抑制作用や抗酸化作用のある色素なんですけども、それらが非常に普通の自然海のものよりも多いということが分かっております。

それから魚類につきまして説明いたします。クロソイ、マゾイ、ハイブリット、エゾメバルというのは前年度から行っておりまして、室内養殖において給餌の仕方によって成長が

異なるのかということでの補償成長と申しますけれども、そのような実験を行っております。それなりに給餌回数を少なくして期間を空けても追いつくという結果が出ております。

それからサーモンにつきましては、前年の12月から行っておりましたけれども、それが夏を越せるかということで実験しましたけれども、やはり昨年の場合は越せなかったということで、今年はそれが越せるかということでちょっと継続して試験してまいります。

また、新たにイトウというものを北大の七飯の実験所から入れまして、飼育しております。最初に小さいものを入れたところですね、ちょっとイトウの泳ぐ形態が直線的に鋭く泳ぎますので、結構水槽の壁に激突して最初のものは死んでしまいました。それで次に入れたものにつきましては、水槽にフェンスを張りまして、したところ落ちるものはないということで、飼育中ですが、今サーモンと一緒に水槽で飼育しております。

それから、ウニにつきましては、まず実入りの悪いウニをどれだけ免疫をよくできるかということで、10週間のスパンでもって飼育いたしました。実入りの悪い部分では、まず4%、実習後には1回目の試験では13から18%、2回目の試験は最初は3%でそれが実習後には20%という結果になりまして、実入りの悪いウニでも配合飼料を使うことによって、実を入れるという結果が出ております。それで試食を行ったところですね、やはり天然のウニに比べて味が生臭いという、磯臭くないという評価がございます。それで餌を更に改良することで、いかに天然のウニに近い味にしていけるかということで令和3年度も続けて実験してまいります。詳細はこちらの報告のほうに書いておりますので、よろしくお願いいたします。○委員長（三澤公雄君） 今の説明で委員の皆様からご発言ありませんか。

なければ繋げて私から。餌のことなんですけれども、餌の部分での研究はまだ手を付けていない、そこまで手が回らないのかもしれないかもしれませんが、ウニのほうの餌も、たとえば熊石にはあまりないかもしれないけども、野菜で出荷できない野菜だとか、そういうものの活用とかということも、コスト面だとか考えたらいいのかなと思うのと、魚のほうはですね、以前、赤井議員も一般質問で言いましたけども、昆虫食の研究ということ、人間より先に魚でやったらどうか。天然の例えば、僕らのやる二海サーモンは、いわゆるニジマスといえど自然海では海に行く前は昆虫を食べているわけですから、かえってそういうストーリーを作る上でも、昆虫の大量増殖という部分で昆虫餌、東南アジアの食の研究なんかをすればですね、適当な虫資源が手に入るものかな。この辺ではウジでも良いのかなと思ったりするんですけども、その辺の研究は大学と図ってできませんか。

○囑託員（横山隆久君） 委員長、横山。

○委員長（三澤公雄君） 横山さん。

○囑託員（横山隆久君） まず、魚についてはですね、今のところ養殖陸上養殖を目指してということで、そちらができるかできないかということでの試験ですので、餌の研究はまだまだ先になると思います。それでウニにつきましては、いろいろところで野菜だとか果物だとかでやっているんですけども、保存ができない、要するに今やっている餌というのは、常温で保存ができますよという餌でございます。

今までの餌だと冷凍しなければならないとか、冷蔵しなければならないという、非常に扱いづらいということで、浜のほうもキャベツもずっと手に入るわけではない。昆布もずっ

と入らないということで、あえて保存ができる扱いやすい餌ということを考えて開発したものでございます。

○委員長（三澤公雄君） 今ある餌を食わすという感覚。熊石も八雲もという研究。要するに横山さんに餌取りに行けというわけじゃなくて、そういうことで、農家の人達にも協力を仰ぐ、熊石全体で協力を仰ぐというかたちで、今あるフレッシュな鮮度の落ちない2、3日ならまだ活きが落ちないよというような研究、ただ魚の部分はまだその段階じゃないのは分かるけども、ウニの場合は主に餌の研究みたいな感じがしたので、そういう今ある資源、たとえばこの時期ならトマトが多いからトマトを食っていましたとか、ある時期になれば餌が変わるというのは、僕はそれもそれでストーリーになるのかなと。研究だからこそ一群をチャレンジというのはその現場だけで頑張れって言ってるわけじゃなくてそういう意味で可能性ができないかなって。

○産業課嘱託員（横山隆久君） 委員長、横山。

○委員長（三澤公雄君） 横山さん。

○産業課嘱託員（横山隆久君） 今、研究しているものはですね、すぐに現場に行って通用するかということで、急がれる部分で、要するにその保存のできる餌、漁師が扱える餌ということで試験中でございます。その保存できる形状にして、要するに固形にして常温で保存できる形状にしたものの、配合とかという部分で研究しておりました。

○委員長（三澤公雄君） 今やれる餌となったら実際は熊石のいち漁業部は、ある時期はホッチャレの鮭を食わせてるって言うじゃないですか。そういう例えば大手餌料メーカーは確かに扱いやすいかもしれませんが、どうなんですか。実際に漁師さんもやっているそういった餌の可能性も駄目なの。研究科目として筋違いならそういう答弁でいいですけども。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） ウニの餌の関係については、また魚類の餌の関係にも通じるものかも分からないんですけども、今横山のほうから話をしましたとおり、現在、北大さんのほうで研究している餌については、まだまだ改良の余地のあるものでして、まず色ですとか味の部分、そこの部分をきっちり評価が得られるようなかたちで成り立たせたいというのが一点。それともう一つ、現在、この餌を活用した落部漁協さんのほうでも今の大量に発生した痩せウニを駆除するだけではなくてそれを活用しようということで、現在、その餌を使って試験も進めてございます。先日はびあのほうで試験の成果報告がございましたが、これらについては順調にいけば新たな養殖資源というかたちになるのかということでございます。

また一方で委員長おっしゃいますとおり、例えばキャベツを使ったウニだとかというようなこともございますし、たとえば魚類であれば例えば四国ですとかあちらのほうですとか柑橘類を餌に混ぜて、そういった差別化を図る意味でいろんなことをやられていると思うんですけども、現在、我々が進めている研究については、まだ先のことだということで認識してございます。まずはこの餌で一定程度、やはりウニとして養殖ウニといえどもやはり味、それと色味ですとかそういったものがある程度評価いただけるような中で進めて行け

ればなど。まずそこを確立してからのことかなということで思っていますので、ご理解のほうよろしく願いいたします。

○委員長（三澤公雄君） 理解した。もう一点聞いていい。餌メーカーのタイアップなの。北大さん。餌メーカーに研究データを提供して、研究資金は餌メーカーからもらっているってこと。この餌に特化して餌の研究をしているということはさ。そういうこと。その理解僕なかったからさ。

○囑託員（横山隆久君） 委員長、横山。

○委員長（三澤公雄君） 横山さん。

○囑託員（横山隆久君） 私の聞いている部分ではですね、餌メーカーと共同で国の補助金をもらって研究していると。それで餌については今実験している餌代はかからないと。

○委員長（三澤公雄君） それは大学の研究だよ。でも製品化というか商品化の研究をやっているんでしょ、八雲は。そっか北大に研究場所を提供しているってことね。

○囑託員（横山隆久君） はい。その実践の場所としては、落部の、ということになります。

○委員長（三澤公雄君） はい。ほかに。それでは、次の関係に移りましょう。

サーモン養殖試験事業について、産業課と水産課から報告をお願いします。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） それでは、お手元の資料の2番目になります。サーモン養殖事業の今年度の経過報告ということで、ご報告させていただきます。

試験の結果でございますが、今年の2月28日現在の状況につきましてお知らせいたします。海面養殖試験につきましては、熊石地域は昨年12月27日、また落部地域は昨年12月29日から、それぞれ海面での養殖のほうを始めたところでございます。これにつきましては先般ご報告のとおり、青森のほうから種苗のほう、だいたい1尾883.7gということで、これは1年目の状況から見て若干大きい種苗を入れまして、熊石、落部それぞれ1,700尾ずつ進めてございます。熊石のほうは一部陸上のほうの施設にも入れまして、養殖の試験ということで進めたところでございます。2月28日現在の状況でございますが、こちら記載のとおり生残数、熊石につきましては、この間の死亡した個体については5尾ということで、生残率99.7%ということでございます。昨年も同時期、2月26日に中間の報告をさせていただきましたが、その際の状況から見ますと、生残率昨年はへい死が16尾、今年の半分の数で16尾ということですので、生残率が98%という状況でございました。それでこの12月に種苗を入れましてから、これまでの間に給餌した量が2,093kgということで、おおよそ2tの餌を投入しまして、1尾当たり1.2kgの餌を投入したところでございます。

また、一方、落部地域でございますが、生残数につきましては、こちら99.4%ということで、昨年の状況からしますと、昨年は97%という生残率でしたので、これから見ますと大変良い数字で進んでございます。ただ、給仕量につきましては573kgということで1尾当たり0.3kgということでちょっと少ない状況になってございます。

あと、陸上養殖試験につきましては、熊石の研究施設のほうで行ってございますが、こちらのほうは2月28日現在で、死んだ数はないということで100%の生存でございます。給

餌量は 78.2 kg ということで 1 尾当たり 0.9 kg、これは昨年とほぼ同様の給餌量というかたちになってございます。

裏面のほうをお願いいたします。中間の測定の結果ということで、熊石地域は 3 月 3 日、それと落部地域は 3 月 4 日に 5 尾ずつ抽出いたしまして測定をしてございます。その内容につきましては、こちらに記載のとおり、平均体長が熊石地域ですが 40.8 cm、平均重量が 1,940 g ということで、これは昨年の 2 月 26 日に実施した中間測定との比較からいきますと、前回は、1 年目の個体につきましては、平均体長で 41.3 cm、平均重量が 1,560 g ということでした。若干体長のほうは小さい状況になりますが重量につきましては昨年から見まして 500 g 近く大きい状態になっているというようなことでございます。こちら写真のほうにもありますが、上のほうの 2 番という数字がついている、これがこの表でいう 2.6 キロ近い個体。若干ちょっとメタボではあるんですけども、こんな状況になってございます。

一方、落部地域でございますが、こちらは 4 日に同じく 5 尾測定しまして、平均体長が 38.8 cm、平均重量が 1,320 g という状況でございます。こちらのほう、昨年、1 年目のときは 2 月 13 日にこちらと同じように 5 尾抽出して測定してございまして、そのときの平均体長が 39.7 cm、平均重量が 1,160 g というような状況でございましたので、昨年より大きいかたちになってございます。

あと、陸上養殖の試験の部分でございますが、こちらでも 5 尾抽出いたしまして、今年の結果は平均体長で 38.6 cm、平均重量は 1,490 g というような結果でございます。これは昨年、1 年目の陸上と比較しますと、昨年 1 年目は、平均体長で 36.6 cm、平均重量で 1,179 g ということでしたので、この 2 年目につきましては今のところ生残率も順調に進んでございますし、重量のほうも順調に伸びていると。そのような状況になってございます。

以上、サーモン養殖試験事業の経過報告ということでご報告させていただきます。よろしくをお願いいたします。

○委員長（三澤公雄君） 報告が終わりました。皆さんのほうからなにかありませんか。

ちょっと聞き逃しちゃったんだけど、給餌量がさ、1 尾当たりばらつきあるけど、これ昨年よりもたくさん食べさせることに成功できているってことなの。それとも昨年もこの程度の餌の量。

○産業課長（吉田一久君） 委員長、産業課長。

○委員長（三澤公雄君） 産業課長。

○産業課長（吉田一久君） 熊石の状況でございますが、熊石は昨年 2 月末現在での 1 尾当たりの給餌量が 1.6 kg でした。それで今年は 1.29 ということで少なくなっておりますが、これの要因といたしましては、この間の海水温の状況を確認してみますと、やはり若干今年は低いと。2 月の平均の水深 1 m、3 m の水温を見ますと、だいたい 7.1℃から 7.5℃という状況なんですけど、1 年目はですね、5.8 と 5.94 ということでございます。そういった中でも去年の方が若干給餌量が多かったのは、給餌のやり方とかその辺に若干の無駄があったのかなということも感じてございます。

そういったことも調整しながら今年度進めてきたつもりでございますが、実は今年の使用している餌、内容は変わっていないということで報告受けているんですけども、餌を蒔くと、だいたい 5 %から 10 %程度が、水に浮いたまま生簀から流出してしまうという状況

が出ております。それを再度集めて、また与えているんですけれども、そういった中で若干の給餌の効率が悪い状況があるということで、今後それらの状況がどのような結果になってくるのかは、ちょっと今注視しているところでございますが、餌の給餌量の部分につきましては、やはり大きく経費がかかる部分でございますので、なるべくこの魚の成長ですとか食べ方に合わせながら効率の良い給餌していきたいということで今やっているところでございますけれども、今回このような状況でございますので、これからまた注視しながら進めたいと思っていますところでございますので、よろしくお願いいたします。

○委員長（三澤公雄君） 丁寧な説明ありがとうございます。落部のほうは同じような内容になりますか。

○水産課長（伊藤 修君） 委員長、水産課長。

○委員長（三澤公雄君） 課長。

○水産課長（伊藤 修君） 落部のほうは、水温がやはり低くて非常に魚の動きが悪くて、それを見ながら給餌をしている。ただ、やはりテクニク的な部分で、熊石さんの場合は、かなり付き切りと言ったらおかしいですけど、そうやりながらやっている部分があってかなり手間をかけています。

ただ、落部のほうは青年部が主体ですけれども、なかなか当番制でやっているんですが、朝晩1回ずつというお約束なんです。朝を抜かしてしまったとか、晩を抜かしてしまったとか、正直に言うともそういうこともあまりにも違うものですから、問い合わせをしました。ある意味ですね、その辺はちょっと良くないことです。

○委員（大久保健一君） 試験にならないんじゃないの。

○水産課長（伊藤 修君） それですね、やはりやる前に熊石さんとも落部と、そういう餌のやり方も含めてですね、打ち合わせもしました。その中でですね、こういう差が出てしまうのはちょっとまずいということもありますので、もう一度そういうテクニカルな部分だとかきちとした体制、そういう部分で、また落部漁協と詰めてまいりたいと思っています。

成長に関してはありがたいことに順調にきているのかなと。やはり気温が上がってくるとですね、非常に食いつきも良くなりますので適正数量を見極めた中で餌をやっていくと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

○委員長（三澤公雄君） 意図的に餌を減らして増体を図る試験かと思ったけども、質問してはじめてそういうことを、正直に言ってもらって嬉しいんだけど、数字だけしかもらってない中でさ、説明がなかったらちょっとね。

○委員（牧野 仁君） あれ、海のせいかなってね。

○委員長（三澤公雄君） 1/4だよ。やった量がさ。それでこの程度の差だったらそういう狙い方もあるのかなと思ったりするけど。

○水産課長（伊藤 修君） 水温がやはり非常に低いです。熊石と比べて。

○委員長（三澤公雄君） 落部も餌が浮くという現象は。

○水産課長（伊藤 修君） それは確認していません。

○産業課長（吉田一久君） よろしいですか。

○委員長（三澤公雄君） はい。

○産業課長（吉田一久君） この餌の部分なんですけど、漁協の担当と別件で電話することがありまして、状況を確認したら結構浮くというような話しは聞いています。それで同じロットの餌が行っていますから、熊石の状況と同じかと思います。

去年は餌が浮かないで、ほとんど沈んで、なおかつ落ちていくスピードが速かったものですから、それはそれでまた無駄な餌も多くなるのでちょっと厄介だったんですけども、浮くのも逆に厄介な面もありまして、なかなか手間もかけながらやっていると。浮いて流れていったやつを集めて、もう一回生簀に戻してということをやっています。なので若干この先データがその辺どのように影響してくるかというのはちょっと心配ではあるんですけども、なるべく去年のデータ、餌を食べたデータなんかを見ながらですね、やはり目標とするところの、だいたい平均で3kgという部分で到達できるような餌のやり方、それをちょっと見極めていきたいなということで進めています。

○委員長（三澤公雄君） メーカーにもちょっと聞いたほうがいいと思うんだよね。熱帯魚、金魚の餌では意識的に浮く餌のほう売れているという話も聞きますから意図的にそういう、今年はチャレンジしているのかもしれないし、単純に表面に浮いているだけだったら衝立でも立てればと思うんだけど、中途半端なところで網からも出ちゃうということでしょう。

○産業課長（吉田一久君） よろしいですか。

○委員長（三澤公雄君） はい。

○産業課長（吉田一久君） 浮いたまま出て行っちゃうんですね。それでももちろん中途半端で潮流の関係で出ていくのも多いんですけども、浮いた状況で出ていくということで、去年にはあまり見られなかった状況なんですね。それで今買っているところにも問い合わせしたんですが、餌自体は何にも変えていないというので、どういう状況なのか製法の違いなのか分からないですけども、変わっていないという報告が受けているんですけども、現実こういう状況だということは相手のほうに伝えている状況です。

浮いている部分で良い面もあるんです。あるんですけども、ただ弊害もあると。ちょっとその辺で難儀している部分はあります。

○委員長（三澤公雄君） もう何か月も買ってるんだったら、浮く餌だって分かっているならサーモンもそういう食べ方するだろうけども、相変わらず外に餌が出ちゃうというんだったら、サーモンの習性と合わないのかもしれない。

ほかに皆さんからなにかありませんか。

○委員（大久保健一君） はい。

○委員長（三澤公雄君） 大久保委員。

○委員（大久保健一君） 今の餌の話なんですけども、事実を聞いて笑ってしまったんですけども、よくよく考えたら笑えない話だなと思って、町長がこれだけやって肝入りの事業で、ほかのマスコミも注目している事業が、そういうことになっているのであれば、かなりまずいんじゃないかなって。町主導でやっている事業としても今後の漁業者のことを考えてやっている事業だし、同じ町のほうも漁業者も同じ熱量でやってもらわないと駄目だと思うんですね。だからそこら辺の話し合いはじっくりしないとまずいと思いますよ。だからそのことを認識されてないからこうなるんでしょ、きっと。漁業者のほうで。



○委員長（三澤公雄君） 大丈夫かい。言葉を加えれば課の取り組みが違うんじゃないかって。

○委員（大久保健一君） そこまで言っていないけど、だけど聞いた瞬間は笑っちゃったけど、よくよく考えたら笑えない話だと思いますよ。

○水産課長（伊藤 修君） 適切に対応してまいりたいと思います。よろしく願いいたします。

○委員長（三澤公雄君） ほかに。なければ以上で。是非水産課のほう、しっかりご指導お願いします。

#### 【産業課・水産課職員退室】

#### 【建設課職員入室】

○委員長（三澤公雄君） それでは、次に3番目、建設工事等競争入札参加資格審査結果について、建設課から報告をお願いします。

○建設課長（鈴木敏秋君） 委員長、建設課長。

○委員長（三澤公雄君） 課長。

○建設課長（鈴木敏秋君） この程、2年毎に更新いたします、建設工事等競争入札参加資格についてですけれども、3年度、4年度分の申請をこの2月に行いました。その整理ができましたので、うち八雲町内業者に関わってですね、議会の皆様方にご報告したいと思います。それでは担当の係長からご報告いたします。

○建設課管理係長（作田知宣君） 委員長、管理係長。

○委員長（三澤公雄君） 管理係長。

○建設課管理係長（作田知宣君） それでは、競争入札の参加資格審査結果について、ご説明させていただきたいと思います。

資料1ページをお開きいただきたいと思います。令和3年度、4年度の建設工事等入札参加資格申請を、去る2月1日から2月26日までの間に受付を行いましたので、その結果についてご報告させていただきます。

はじめに、申請の受付状況でございますけれども、全体の有資格者は706社となっておりまして、前回比でいきますと44社の減ということでございます。そのうち八雲町内業者につきましては58社でございまして、前回比4社の減でございます。町内業者のうち更新をしなかった業者につきましては、まず1社目が土木・舗装の有資格者でございました、株式会社シンオシマでございます。シンオシマにつきましては会社の吸収合併に伴う廃業ということで、今回、更新をしなかったということでございます。それで2社目が電気の有資格者でございました、有限会社Y・B、そして3社目が屋根の有資格者でございました、井口板金所、4社目が塗装の有資格者でございました、横木塗装店ということで、4社が八雲町内において更新をしなかったということでございます。なお、今回につきましては、新規での登録業者はございませんでした。

続きまして、工種の増でございますけれども、有限会社山崎牧場についてでございますが、山崎牧場については、前回とび・土工の業種のための登録であったわけでございますけれども、今回についてはそれに加えて土木ということで工種の増ということでございます。

工種の減につきましては、有限会社蜂谷工業におきまして、土木で今回登録を申請しなかったための減というふうになってございます。

6番目の等級の格付け、等級格付けの変更の業者でございますけれども、現在格付けを行ってございます、土木・建築・管においては格付けの変更業者が今回についてはございませんでした。それで各格付け等級の数は、1ページの下段の表に記載してございまして、まず土木につきましては、A等級が11社、B等級が9社、C等級が4社の計24社ということになってございます。建築につきましては、A等級が4社、B等級が13社の計17社となっております。管につきましては、A等級が5社、B等級が4社の計9社となっております。解体工事業につきましては、平成28年6月1日に建設業法の一部改正が行われまして、新設された業種でございまして、今回はじめて等級格付けを行うものでございますけれども、A等級につきましては11社、B等級につきましては14社の計25社となっております。参考までにカッコ書きで記載された数字が前回の数字ということになってございます。

2ページ目に参考までにでございますけれども、八雲町内業者で等級格付けを行っている土木・建築・管・解体の等級別名簿を記載させていただいております。なお、電気につきましては、前回過去に格付けをしていたところでございますけれども、今回は前回に引き続き格付け等級を行わないことということにしてございます。

以上、大変簡単ではございますけれども、入札参加資格審査の結果の報告とさせていただきますというふうに思います。よろしくお願いいたします。

○委員長（三澤公雄君） 説明が終わりました。皆様のほうから何にかご発言ありませんか。

ちょっといいかな。知識がなくて聞いて申し訳ないんですけども、解体業者さん今回初めての等級格付けということですけども、AとBの解体格付けってどういうふうに付けるの。

○建設課管理係長（作田知宣君） 委員長、管理係長。

○委員長（三澤公雄君） 管理係長。

○建設課管理係長（作田知宣君） 格付けについては、土木も建築も管もそうなんですけれども、数値化したものがございまして、これは国で行っております、経営審査事項というものがございまして、経営資格審査というものがございまして、これは各業者さんすべて受けているものでございまして、会社の実績ですとか従業員の数、いろいろなものを数値化したものがあるんですけども、それに八雲町独自で例えば工事の成績ですとか、あと社会貢献活動ですとか、雇用の関係とかで数値化しているものがございまして、それを加算したもので総合的に何点かというのを、各業種ごとにすべて点数化してございますので、なので基本的にはその点数によって何点以上をA等級、それ以下をB等級と分けているというかたちになりますので、分け方としては土木とか建築とかと同じような考え方で等級を分けているというかたちでございます。

○委員長（三澤公雄君） はじめての等級格付けだから、AとBの境目の根拠ってあるんでしょう。それとも土木とか建築から引っ張ってきただけなの。

○建設課管理係長（作田知宣君） 委員長、管理係長。

○委員長（三澤公雄君） 管理係長。

○建設課管理係長（作田知宣君） 基本的に根拠と言われてしまうと、何点で切るという言い方はあれですけども、何点以上というかたちになってしまうので、それ自体に明確な根拠があってやっているのかと言われてしまうと、全くもって根拠がないわけではないんですけども、この格付けの点数を何点にするかというのはですね、登録業者の割合といいますか、AとBであまり偏らないようなかたちに。業者数的にも、構成がAとBがあまり偏らないかたちで、工事の金額ですとか工事量を勘案して決定しているというかたちを取らせていただいておりますので、根拠と言われてしまとなかなか説明としては難しい部分はあるんですけども、全体的な構成を考えてある程度設定をさせていただいているということでご理解いただければなというふうに思っております。

○委員長（三澤公雄君） わかりました。ほかにありませんか。  
なければ終わります。ありがとうございました。

#### 【建設課職員退室】

#### ◎ その他

○委員長（三澤公雄君） 報告案件はすべてこれで終わったんですけども、4番のその他について話し合ってみたいと思います。

副委員長とも話し合ったんですけども、任期までそんなに時間はないんですけども、ちょっと研究テーマとして、ひとつ提案したいのがございまして、知ってる人は知ってるんですけども、以前議運でですね、「核抜き条例」を共議団のほうから提案されたときに、それは、ちょっと合わないからといって却下しました。僕もあまり乗り気じゃなかったんですけども、そのあとちょっといろいろ時間あるなかで考えたんですけどもね。

研究するということで、町民のある一定の署名が集めることができれば、直近の住民の意思を反映させるっていう意味での住民投票ができるよっていうことを、議会主導で条例を作るっていうのは、どうだろうかというふうに、ちょっと思いつきましてね。それをちょっと研究するっていうことで、皆さんのお時間を、任期までの間、使うのはどうだろうかということを提案したいと思います。各委員、自由なご発言をお願いします。

○委員（大久保建一君） すいません事務局に。ちょっと法令的な知識がないので、その住民投票に関する何か条例を作ってしまうと、すぐできるのか、なくてもできるのか、その辺の下地がわからないので、わかる部分だけ教えてください。

○議会事務局長（井口貴光君） まずは、住民投票をするためには、条例が必要になります。八雲町の場合は、自治基本条例がありまして、その中に住民投票については、ちょっと中身は記憶ありませんけども、規定しているんですが、その中でも、そういった場合は、条例を制定しますよという、確かそういう内容だったと思いますので、いずれにしても、住民投票は条例が必要だという認識で見ていただければよろしいかと思います。

○委員長（三澤公雄君） 今回、これを提案したのは、これまでは例えば、直近で行けば「核抜き条例」だとか、もっとよその町でいったら、原発を受け入れるときの意思表示の住民投

票だとか、そういう問題提起を住民の方からされて、そのことを取り上げるか取り上げないかを議会で判断するという機会があって、多くの場合、議会側が我々は住民の代表だから、我々で判断するんであって、住民投票はそれにそぐわないみたいな感じで否決してるっていうのが、多くの日本の例だと思うんですけども。

僕は、個別のものが来た場合よりも、割とオールマイティに使えるよという条例案を議会のほうで作るっていうほうが、議会が開かれているというか、住民の意見に対して、聴く姿勢があるんだっていうことを、前もってアピールできることになるので。もちろん議会の議決はそれに縛られないで、それをどう尊重するかは、議員個々の考え方なんですけどね。そういったかたちで勉強を進めていったのちに、そういった条例が作れるような下地が、総務経済常任委員会で、温まってくれば、全員の議員で話し合うきっかけを作ればなど。それは理想的にいった場合の話ですよ。そもそもどういった問題があるのかっていうことを、一人の議員で調べるよりも、この常任委員会というチームで調べていったほうが、否定的な考えの人は、否定的な研究をされるだろうし、そういう意味でいいのかなと思って。僕はどうしても肯定的に自分のアイデアで思い浮かんだもので、できるという先入観で考えてしまいますから。

どうでしょう総務という常任委員会はなかなか具体的な宿題を作るのが難しいポジションだったので、残り任期僅かですけど、考えてみるということを、やってみたいなと僕は思うんですけども。

○委員（大久保健一君） 反対するにも、調査して、よく知らないと反対できないので、それを調査項目にするということ自体には反対しません。

○委員長（三澤公雄君） そう広く考えてもらえれば。

○委員外議員（千葉隆君） 委員外議員でもいい。

○委員長（三澤公雄君） はい。

○委員外議員（千葉隆君） 委員長の発想だとかはお聞きしたんだけど、自治基本条例あって、その条例の中でできるとなっていて、その自治基本条例の部分では、自治推進委員であるわけですね。本来、住民投票というのは住民が自主的にという部分で、議会で作って、ありますよっていうやり方もないわけではないけど、まあそれは三澤さんの考え方で。

もう一方、自分たちの町は自分たちでつくるんだと、だから議会の基本条例があって、自治推進委員といって、そういう人たちもある程度、条例は議会で決めるからっていう部分では、議会にも連携する部分もあるから、ある程度そっちのほうでも練ってもらいながらというか、そういうことも研究対象に入れてほしいなと。やるのであれば。自治推進委員会との連携とか、つながりとかもやっていかないと、何となく住民の意思とかは、自分達で決める、自治基本条例の基本というのは、そっち側にあるんじゃないかなと思うから。

その辺の勉強というか研究というかというのも、やるのであれば調査してほしいなと。あまり議会だけで全部調査して、全部作って条例やるというのも、本来の自治の進め方としてどうかなと。ちょっとお願いというか。

○委員長（三澤公雄君） 僕も研究するにあたって、このメンツで調べてきたものだけではなくて、知見のある人だとか、もちろん自治推進委員さんというのも、こんな考えはどうだろうかということでは、一緒にひざを交えて話し合う下地は必要だなと思ったので、千葉議

員の発言は、逆に勇気をいただきましたので、進めるのであれば、ぜひそういうかたちで進めていきたいと思っています。

皆さんの中では、ほかにありませんか。では異論がないということで研究テーマに。スケジュールは限られていますけども、副委員長とも話し合って、積極的に常任委員会のスケジュールの中に入れていきたいと思いますので、どうぞご協力のほどよろしく願いします。

はい、それでは終わります。

[ 閉会 午後 2時09分 ]